

山形県埋蔵文化財調査報告書 第32集

若王寺遺跡  
明成寺遺跡  
三田遺跡  
発掘調査報告書

山形県教育委員会

やく おう じ  
若 王 寺 遺 跡

みょう じょう じ  
明 成 寺 遺 跡

きん でん じ  
三 田 遺 跡

発 挖 調 查 報 告 書

昭 和 55 年 3 月

# 序

昭和54年度より山形県教育庁庄内教育事務所のなかに、埋蔵文化財調査室が設けられました。これは増大する開発事業に対して埋蔵文化財の保護をはかり、緊急の調査に対応していくこうとするものであり、庄内地方における埋蔵文化財行政の充実を目指すものであります。

今年度は、新設された埋蔵文化財調査室が県営圃場整備や河川改修にかかる五つの遺跡の緊急調査を実施しました。若王寺遺跡と明成寺遺跡は総合バイロット事業にかかるものであり、三田遺跡は県営圃場整備事業にかかるものであります。これらについては前年度より、所管の農林水産部耕地二課や各事業所と協議を重ね、とくに遺跡へ支障を来す用排水路部分などを中心に記録保存のための発掘調査を実施することになりました。

調査は関係各方面のご協力をえて、とどこおりなく予定通り完了することができました。明成寺遺跡において珍らしい鎌倉時代の笠塔婆が発見されるなど、古代から中世にかけての地域の歴史にいくつかの新らしい所見を加えることができましたことは大きな成果であります。ここにそれらの遺跡の調査結果をとりまとめ、報告書として刊行することになりました。

発掘調査にあたり御協力いただいた山形県農林水産部耕地二課、最上川右岸土地改良事務所、赤川土地改良事務所、酒田市教育委員会、三川町教育委員会、地元部落の各位に厚く御礼申し上げます。

昭和55年3月

山形県教育委員会

教育長 吉村敏夫

## 例　　言

1. 本報告書は庄内教育事務所埋蔵文化財調査室が調査を実施した酒田市若王寺遺跡・明成寺遺跡、三川町三田遺跡の調査結果を合併し報告するものである。
2. 発掘調査は山形県埋蔵文化財緊急調査団が主体となり、調査担当を庄内教育事務所埋蔵文化財調査室が実施し、最上川右岸土地改良事務所、赤川土地改良事務所、酒田市教育委員会、三川町教育委員会の協力を得て行われたものである。
3. 插図縮尺は二分の一を原則とし、それぞれにスケールを示した。
4. 発掘調査は川崎利夫主任調査員(庄内教育事務所埋蔵文化財主査)、野尻 侃(現場主任)、長橋 至(調査員)が担当した。
5. 本報告書の執筆は川崎・野尻・長橋、編集は安部 実が行った。

# 目 次

I. 調査の経緯	1
II. 若王寺遺跡	3
III. 明成寺遺跡	7
N. 三田遺跡	14
V. 総括	21

## 挿図版

第1図 遺跡位置図	2
第2図 若王寺遺跡全体図	3
第3図 若王寺遺跡土層図	4
第4図 若王寺遺跡遺構平面図	5
第5図 若王寺遺跡出土 須恵器	6
第6図 明成寺遺跡全体図	7
第7図 明成寺遺跡土層図	8
第8図 明成寺遺跡遺構図	10
第9図 明成寺遺跡出土木製品	12
第10図 明成寺遺跡出土五輪塔残欠	13
第11図 三田遺跡全体図	14
第12図 三田遺跡土層図	15
第13図 三田遺跡遺構平面図	17
第14図 三田遺跡出土 須恵器	18
第15図 三田遺跡出土 須恵器	19

図版1 若王寺遺跡遠景・近景・土層堆積状況	
図版2 若王寺遺跡出土遺物 須恵器	
図版3 明成寺遺跡遠景・近景・調査区	
図版4 明成寺遺跡遺物出土状況	
図版5 明成寺遺跡 SE-1 井戸跡	
図版6 明成寺遺跡出土遺物	
図版7 明成寺遺跡出土木製品	
図版8 三田遺跡遠景・調査区近景・遺物出土状況	
図版9 三田遺跡 SD-6溝跡・遺物出土状況	
図版10 三田遺跡調査区近景	
図版11 三田遺跡出土遺物 須恵器	
図版12 三田遺跡出土遺物	

# I. 調査の経緯

昭和54年4月、山形県教育委員会の庄内教育事務所内に埋蔵文化財調査室が置かれ、これによる最初の調査として、酒田市若王寺及び明成寺遺跡、三川町三田遺跡などの発掘を担当することになった。これに先立って昭和53年度において、県教育委員会文化課は先に提出あった来年度県営圃場整備事業と総合パイロット事業計画が及ぶ遺跡を検討した結果、庄内地区において以上の3遺跡が事業計画内に含まれることを確認した。そして保存についての協議を重ねたが、3遺跡とも工事から除外して現状保存をはかるとは不可能ということになり、発掘調査を実施して記録保存をはかることになった。

昭和54年10月、県教委文化課では調査員を派遣して各遺跡について調査計画を樹立し、遺跡についての情報を収集するため現地確認調査を行った。それらにもとづいて庄内教育事務所埋蔵文化財調査室が調査を担当することになり、新年度に入り関係各機関が集つてさらに詳細協議を行い、次のような日程で発掘調査を行うことになった。

若王寺遺跡 昭和54年4月23日～5月30日（延24日）

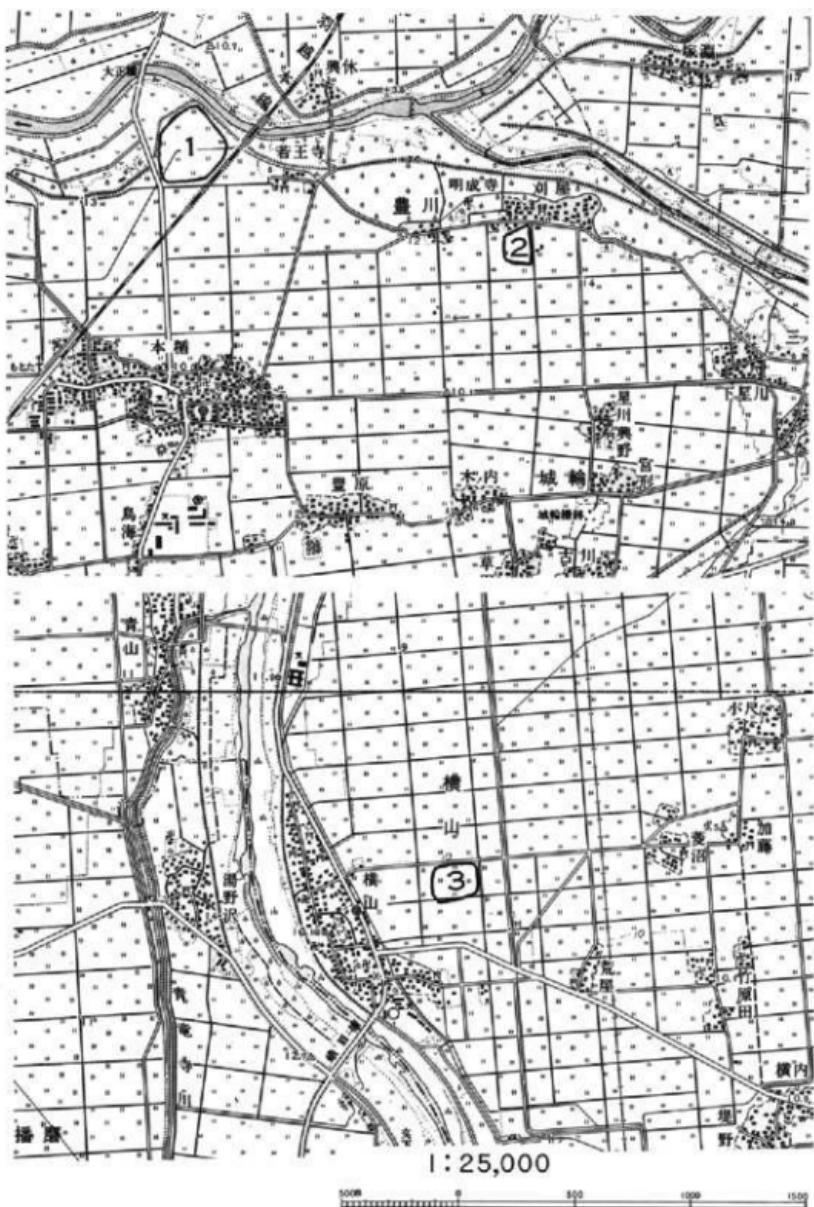
明成寺遺跡 昭和54年6月1日～7月13日（延26日）

三田遺跡 昭和54年7月25日～8月29日（延21日）

これらのうち、若王寺及び明成寺は総合パイロット事業、三田は県営圃場整備に関連する遺跡である。

発掘調査にあたっては、特に破壊度の著しい部分のみについて発掘を行い、記録保存をはかる方針でのぞみ全面発掘は行っていない。しかし遺跡の範囲や遺構集中部分を把握するため、トレンチ掘りや坪掘りを行って精査面積をはるかに上まわる部分を発掘した。若王寺は発掘面積4,000m<sup>2</sup>、内精査面積550m<sup>2</sup>、明成寺は発掘面積3,000m<sup>2</sup>、内精査面積600m<sup>2</sup>、三田遺跡発掘面積3,600m<sup>2</sup>、内精査面積820m<sup>2</sup>である。発掘調査が部分的な精査に限られたため、遺跡の性格や全容を明らかにするまでには至らなかったが、若王寺は平安時代、明成寺は平安時代と中世の複合、三田は近世の陶磁器なども出土しているが平安時代の遺跡であることが確認され、それぞれの時期の遺構・遺物が発見された。

以上のような経緯で、発掘調査は当初の計画通り完了した。出土遺物は3遺跡を通して整理箱10箱であり、すべて整理を完了し埋蔵文化財調査室に保管している。



第1図 遺跡位置図（1 = 若王寺遺跡・2 = 明成寺遺跡・3 = 三田遺跡）

## II. 若王寺遺跡

### 1. 遺跡の概要

本遺跡は荒瀬川と日向川が合流し、1kmほど下流で大きく屈曲する先端部の沖積微高地にある。遺跡は屈曲した日向川の土堤内側水田上に位置し、標高8mを測る。昭和38年の遺跡台帳によれば、日向川の土堤を構築する時点で、また羽越線建設時に付近の土砂を探取した際に、須恵器片が多量に出土したと記録されている。昭和53年の事前調査では現水路南部に遺物包含層も確認され、若干の遺物も検出された。これらの事により、54年度施行される庄内地区農業基盤総合整備パイロット事業の大規模な開発の前に遺跡の適切な保護対策を必要とし、関係諸機関との協議により発掘調査を実施したものである。

調査では上記の通り、現水路北部は擾乱が激しく遺物包含層も破壊されており、遺跡としての保存状態は悪いものであった。

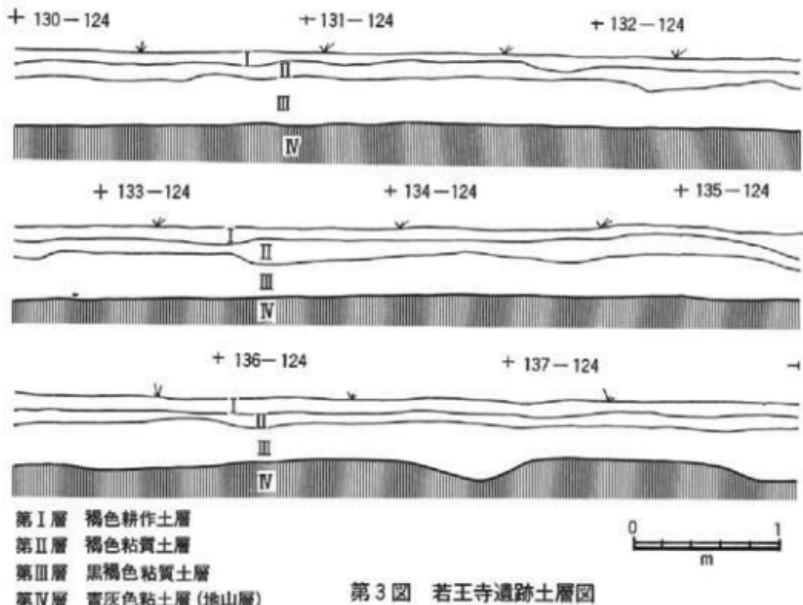


第2図 若王寺遺跡全体図

## 2. 調査の経過

発掘調査は、今年度施行予定地内の計画杭(No.32)を基点としたグリッド設定作業から始めた。調査地は、日向川の大きく屈曲する内側自然堤防上の水田となっている部分である。グリッドのY軸線は、基点杭を中心に磁北に合せた。南北800m、東西800mの範囲に、2mを単位とするグリッドを設定した。そのグリッドの呼称は、X軸より先に10(X)-10(Y)グリッドと呼ぶようにした。調査の当初はグリッド設定作業と、遺構・遺物の集中区域の探査を行った。探査は1m×1mのテストピットを現水田上に20m単位に設けて行った。

また一方では遺跡の層序を確認するため、テストピットの一つを大きく広げ深掘りした。層序は第Ⅰ層褐色耕作土層、第Ⅱ層暗褐色粘質土層、第Ⅲ層黒褐色粘砂土層、第Ⅳ層青灰色粘質土層(地山層)で、遺物は主に第Ⅲ層中に包含される。耕作等により第Ⅰ・Ⅱ層にも若干の遺物の出土があった。これらは須恵器・赤焼土器で、いずれも破片である。遺構は、第Ⅳ層青灰色粘質土層(地山層)を掘り込んで発見された。調査の前半から中頃にかけては土層の測図や遺構・遺物の集中区域の探査を主作業とし、遺構検出作業を始めた。粗掘り作業では2~3の土器片が発見されたのみで、良好な集中区域を示すテストピットは見られなかった。調査の後半になると、110~135-123グリッド付近で溝跡と考えられる黒色土が確認されたため、この付近を中心に掘り広げ精査を進めた。



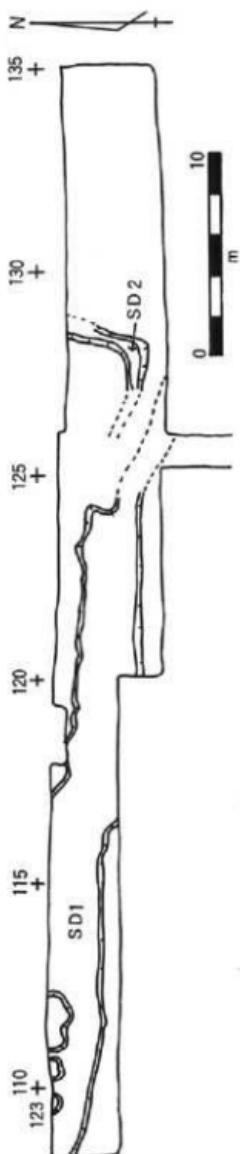
### 3. 発見された遺構

本遺跡で発見された遺構は、溝跡が二条ある。溝跡は本遺跡のほぼ中央部110～129～123グリッド内に東西34mの長さで検出された。

**SD1溝跡** 110～127～123グリッド内で確認された溝跡で、最大幅で2.3m、最小で1.8m、深さ23cmを測る。覆土は暗褐色土に青灰色ブロックが所々に混る同一の堆積を示す。底面は全体に平坦である。溝は東方で不明瞭となり、とぎれる。北側に用排水路が建設されており、延長部は不明である。

**SD2溝跡** 127～129～123グリッド内で確認された溝跡で、128～123グリッドで北方に方向をかえて検出された。幅は80cm内外で、深さ20cmを測る。覆土はSD-1と同様である。底面はわずかにくぼんでおり、船底形を呈している。

両溝跡内からの出土遺物は、須恵器壺・壺蓋等の破片や赤焼土器片で、いずれも少量である。土器片は摩滅しており、これら溝の時期を明確に示す出土状態ではなかった。



第4図 若王寺遺跡溝跡平面図

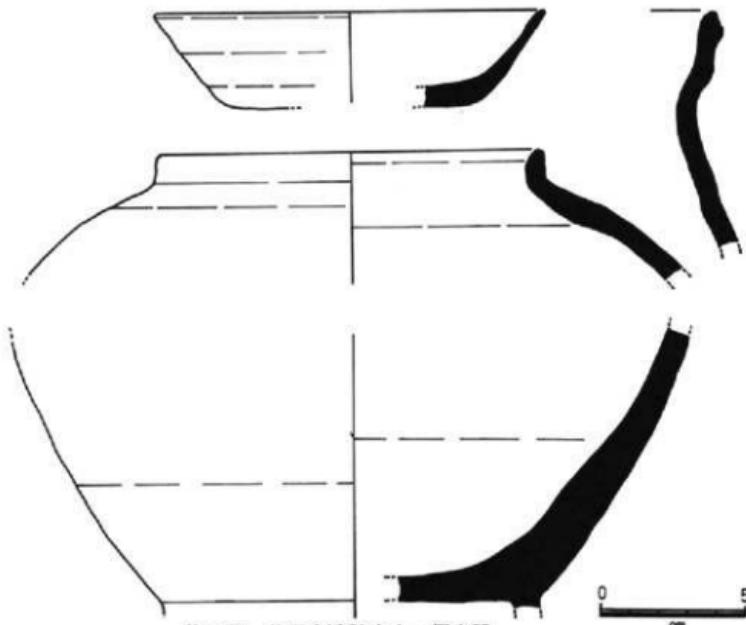
#### 4. 出土遺物

本遺跡出土の遺物は土器だけである。細かい破片が多く、器形のわかるものは甚だ少ない。破片総数1,557片中、赤焼土器が1,290片で83パーセントを占め、もっとも多い。須恵器は222片で14パーセント、黒色土器は36片という構成になっている。黒色土器は、いわゆる内黒土器のみである。

もっとも多い赤焼土器は底部糸切りによる壊が圧倒的に多く、他に高台環、壺、鉢、甕の類がある。須恵器は甕や壺が多く、内外面とも押圧痕が認められる。壺にあっては、底部糸切りとへら切りの両様がある。土器は9世紀末から10世紀代にかけてのものであろうと推測される。

#### 5. まとめ

本遺跡は、度重なる河川の氾濫などにより良好な状態で遺構が検出されず、溝跡などを確認したにとどまったが、遺物からみて平安時代中期の集落があったものと思われる。出土土器中、赤焼土器が80パーセント以上を占めるることは、当時の庶民の間では赤焼土器が日常什器の主流をなしていたことがうかがわれる。



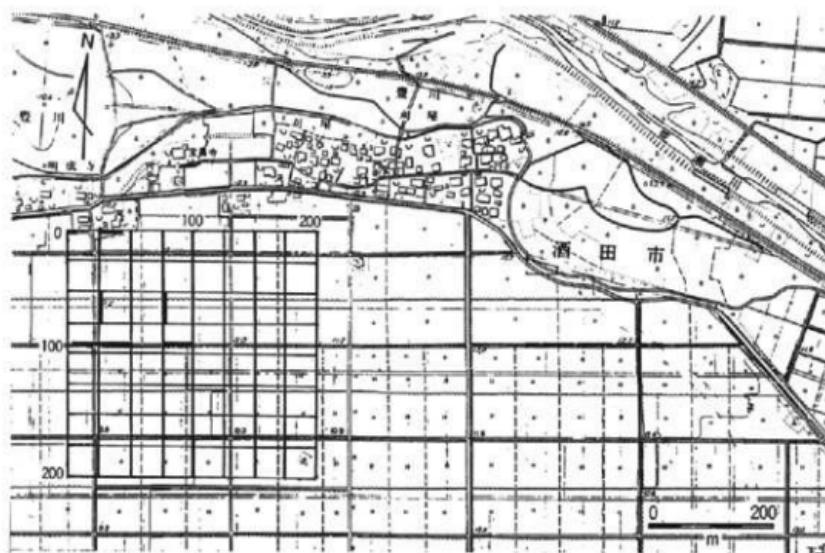
第5図 若王寺遺跡出土・須恵器

### III. 明成寺遺跡

#### 1. 遺跡の概要

明成寺遺跡は酒田市豊川字明成寺にある。日向川・荒瀬川の合流地点より500m上流の荒瀬川左岸、旧氾濫原上に立地しており、標高10mを測る沖積平地上である。地目は水田・果樹畠地となっており、地形は西方にいくにつれわずかに低くなっている。

付近には出羽国府跡と考えられている史跡『城輪柵跡』をはじめとして、古代集落跡と推定される遺跡が数多く存在している。また地名などからも条理制を示す遺跡など、律令制下の出羽国を考えるうえで貴重な遺跡が多い。本遺跡も昭和46年春に地権者的小松久助氏が果樹地に引く用水路を掘った際、柱根と思われる角材を発見した。知らせを受けた酒田市教育委員会では、柏倉亮吉山形大学教授(現米沢女子短期大学学長)と共に遺跡の内容・範囲等の確認調査を行い『明成寺遺跡』として登録した。その内容は中世の掘立柱建物跡一棟、井戸跡一基を確認し、果樹畠地周辺に遺跡が広がると報告している。

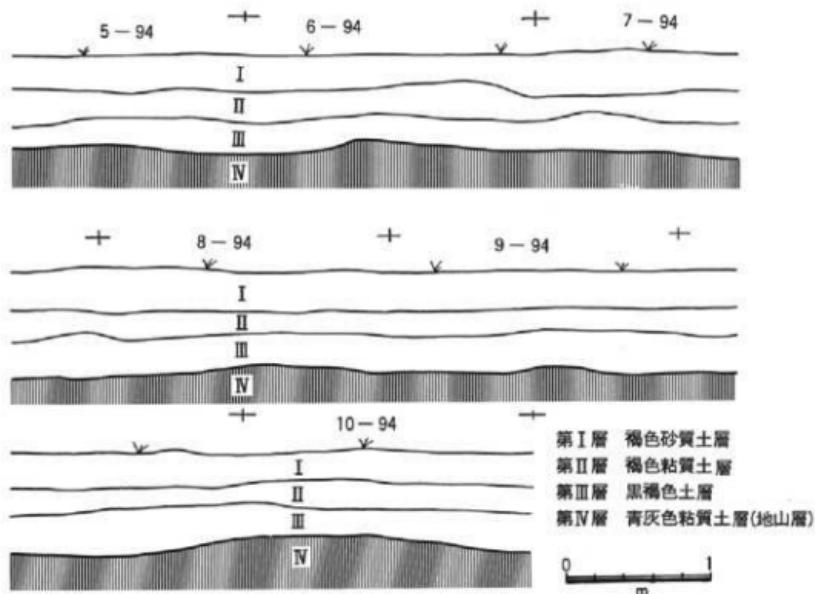


第6図 明成寺遺跡全体図

## 2. 調査の経過

調査はパイロット事業計画の用排水路に合せて、 $2\text{m} \times 2\text{m}$ を一単位とするグリッドを設定することから始めた。グリッド設定中は遺構・遺物の集中地域の探査を、計画用排水路上をトレント方により粗掘りした。一部は深掘りし、層序の観察を行った。層序は第Ⅰ層褐色砂質土層、第Ⅱ層褐色粘質土層、第Ⅲ層黒褐色土層、第Ⅳ層青灰色粘質土層(地山層)である。遺物は第Ⅲ層黒褐色土層中に包含され、遺構は第Ⅳ層上面で検出された。

5-14-94-95グリッドの第Ⅲ層や第Ⅳ層上面から、須恵器片や黒色土器片が集中して出土した。面精査を行い、遺物の出土地点やレベルを測り取り上げた。遺物は押し流された状態で散乱していたため、ほとんどの土器は摩滅している。調査前半では、このグリッドの精査班と果樹畠地付近のグリッド(2-5-51・52)粗掘り班の二班に分かれ調査を進めた。調査中期になると、5-14-94-95グリッドではトレント内底面に第Ⅲ層中位より始まる掘り方(SE-1)が発見された。SE-1は、後に掘り抜き井戸と判名した。果樹畠地付近の調査では、五輪塔残欠が出土した。3-51グリッドでは不整の円形を呈した窪地を確認し、覆土を掘り下げたところ箆塔婆木片等を検出した。



第7図 明成寺遺跡土層図

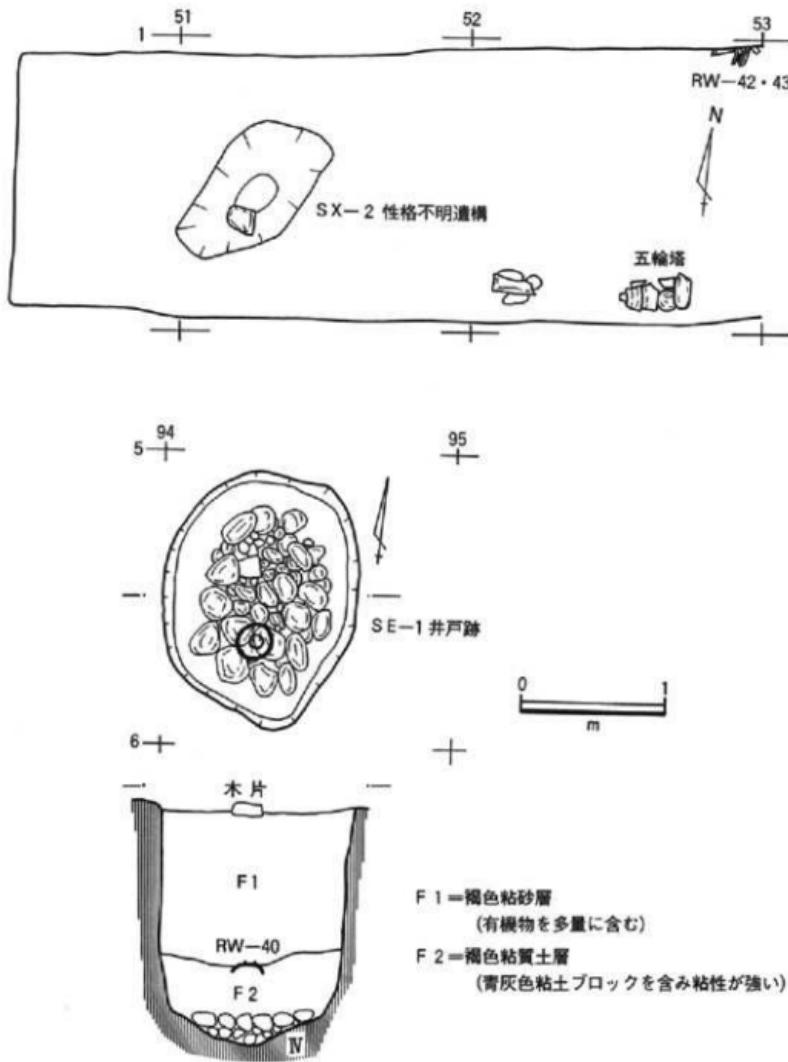
### 3. 発見された遺構

本遺跡で発見された遺構は井戸跡(SE-1) 1基、性格不明の落ち込み(SX-2) 1基である。

**SE-1井戸跡** SE-1井戸跡は、5-95グリッドの表土下80cmで検出した。この地域は、第Ⅲ層黒褐色土が40cm~50cmに厚く堆積している。はじめは土器片が集中して散乱していることから、遺構の存在を思わせた。トレンチ壁面及び、面精査により検出したものである。測定値は長径180cm、短径135cm、深さ160cmを測る。橢円形を呈する掘り抜き井戸である。覆土上面には長方形を呈した木材が横たわり、中位では直径12cm、器高4cmの木桶(RW-40)が伏せられた状態で検出された。井戸跡壁面は、棒状のもので突刺された跡が確認された。底面には10cm~15cmの河原石が敷きつめられている。上面で検出した長方形の木材は幅15cm、長さ60cm、厚さ7cmを測り、井戸跡の上部木枠の一部と思われるが他に検出されないことから性格は不明である。

**SX-2性格不明遺構** SX-2性格不明の落ち込みは3-51グリッド、表土下25cmで検出した。この地域では五輪塔の残欠が散乱していることから10mトレンチ(2-5-51グリッド)に広げ、面精査で検出したものである。測定値は長径110cm、短径60cmを測る。平面形は不整な橢円形である。第Ⅳ層を15cm程掘り落めた、ゆるやかな船底状を呈した土坑である。覆土は有機質土壤である。五輪塔の火輪部残欠が直立して検出され、笹塔婆や木札状木片が出土した。文字を判読出来る 笹塔婆は3片ある。この3枚の 笹塔婆は重なって発見されたもので、束ねられていたものと考えられる。この遺構は供養地として五輪塔が建てられ 笹塔婆を供えていたものと思われるが、何を供養したものかは不明であり伝承はないようである。

以上2つの遺構であるが、井戸跡の時期は付近の出土遺物や木桶などから平安時代末期と推定出来る。SX-2性格不明遺構は五輪塔や 笹塔婆から、鎌倉時代から江戸時代までと推定出来るが、細かな時期は不明である。



第8図 明成寺遺跡遺構図

#### 4. 出土遺物

本遺跡出土の遺物には、土器、陶器、木製品、石製品、それに自然遺物がある。

土器の中では赤焼土器が128片を数えもっとも多く、須恵器と須恵器系中世陶器とで34片、黒色土器18片、すり鉢を主とした近世の陶器片12片を数えることができる。平安時代の赤焼土器、黒色土器、須恵器と、中世の須恵器系陶器、越前焼、かわらけなどの赤焼土器が相半ばするようである。

木製品では、SX-2と、その近くから篠塔婆とその断片7片、井戸跡SE-1より木椀が出土した。篠塔婆は遺構面より僅かにくぼんでいる不整円形の遺構SX-2より重なっているような状態で検出された。RW-42-1は長さ185mm、最大巾14mm、厚さ1mmで、上部を山型に削り、「以食口是到本飲食純仲利并極地世」と墨痕が認められる。RW-42-2は、長さ178mm、最大巾15mm、厚さ0.9mm、やはり頂部を山型にし、「生成獻如是德戲」の文字が認められる。RW-42-3は長さ161mm、最大巾14mm、厚さ0.9mm、「各以衣神威果妙□供養他一万十万□□即」と読まれる。その他、これと同じ材質の残片が3片出土している。

RW-43は、長さ266mm、最大巾33mm、厚さ4~1.5mmの板状をなす。片面に墨痕が認められるが、判読できない。

RW-40は、SE-1井戸跡の底部直上より伏せられた状態で出土した。外面黒漆、内面朱漆の木椀で、漆の剥落が著しい。高台部に巾1.5mm、深さ1mmの条線が入る。口縁径142mm、器高49mm、底径66mmを測る。

篠塔婆を出土した地点の東1.5m~2mより、五輪塔残欠が出土した。軟質の凝灰岩製で、空輪の上部、火輪の上部が欠失しており、地輪も僅かに一部を残しているにすぎない。火輪には、ゆるやかな軒反りが認められる。

#### 5. まとめ

今回の調査は、圃場整備計画にともなう用排水路部分の調査に限定したため、広範にわたる調査はできなかった。この近くから、角柱の建物跡や若干の土器が発掘されたことがある。遺物よりみれば、平安時代の土器とともに中世の土器・陶器も出土しており、検出された掘り抜き井戸は中世に属するものであろう。

篠塔婆が出土した例は県内ではじめてであるが、五輪塔残欠の出土と併せて考えて、近くに中世の墓地があったと考えられる。時期は鎌倉期であろうと推定される。篠塔婆は中世に盛行したらしく、県内でも山形市山寺立石寺境内の岩窟中より柿経とともに多量に発見されている。SX-2の浅い土坑を中心に篠塔婆が出土し、五輪塔片が散乱している状況は近くに中世墳墓があるか、何らかの理由により破壊された墳墓の痕跡を示すようである。ともあれ掘り抜き井戸などもあり、土器片も散布していることは遠からぬ場所に建物跡があったことを想定させるのである。



RW42-1



RW42-2



RW42-3



RW43



RW42-4



RW42-5



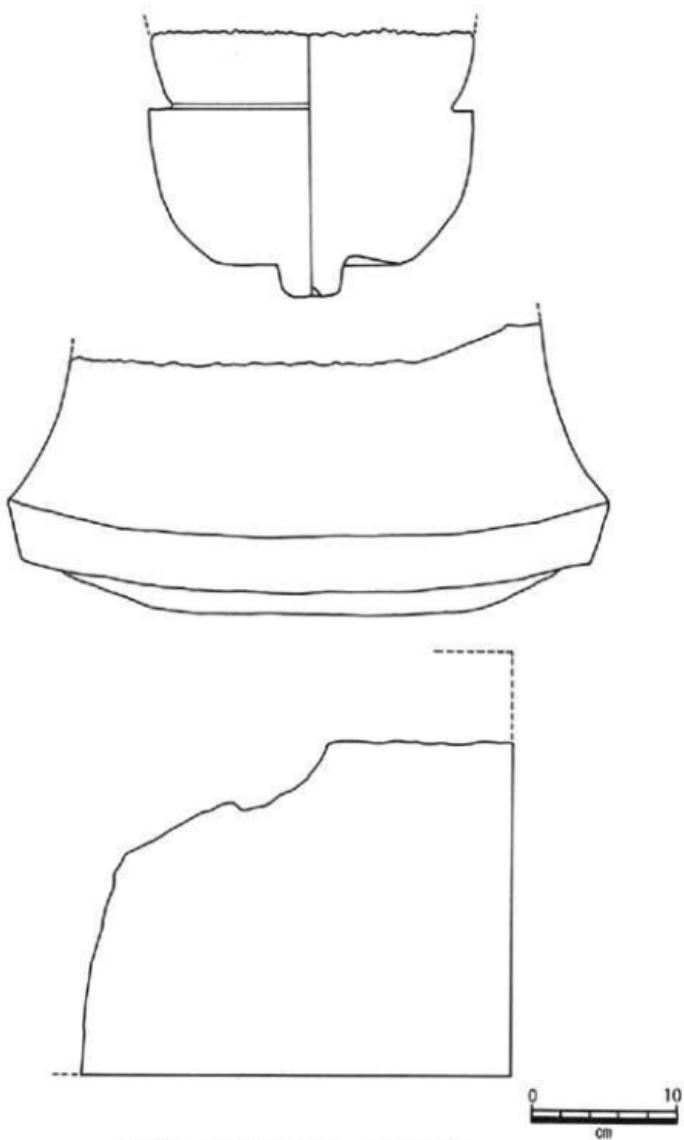
RW42-6



RW40



第9図 明成寺遺跡出土・木製品



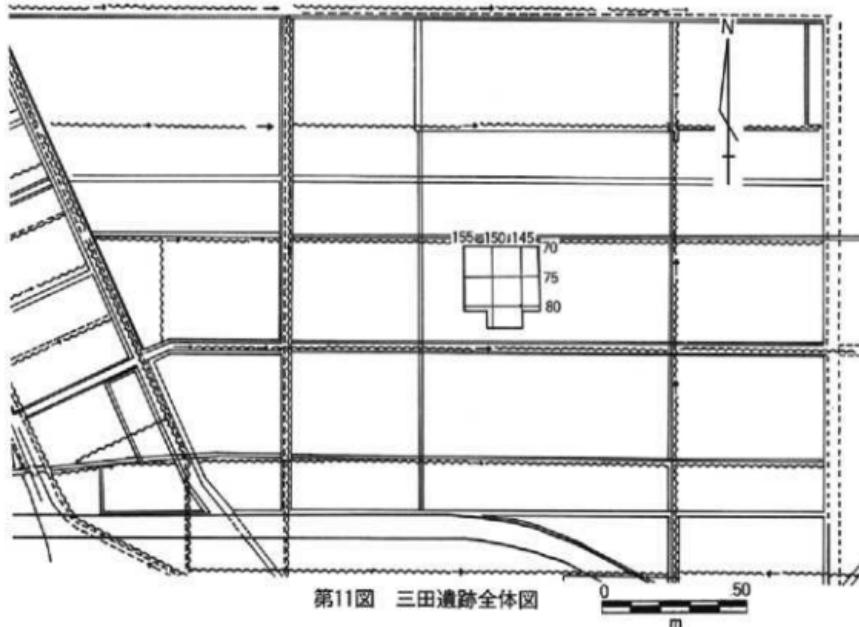
第10図 明成寺遺跡出土・五輪塔残欠

## IV. 三田遺跡

### 1. 遺跡の概要

三田遺跡は赤川右岸の横山部落より東方約500mの沖積微高地にある遺跡で、標高約10mを測る。横山部落内には室町～戦国時代にかけて、しばしば庄内史に登場する横山城があり、東方には南北朝の頃よりの名城「藤島城跡」、その支城と考えられる平形館などがある。本遺跡は昭和52年度に施行された大規模灌排水用水路建設の際、用水路敷地内から井戸跡と思われる所より曲物が出土し、三川町教育委員会が緊急に調査を行い、遺跡として登録されたものである。しかし、この調査では出土地点に限った調査で終り、正確な遺跡の範囲はとらえられなかった。

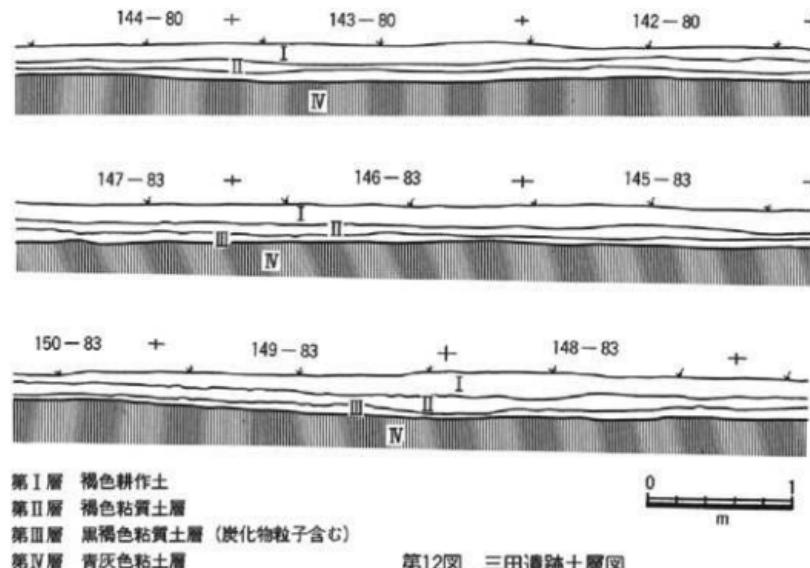
昭和53年の秋に、県営圃場整備事業が係る地域で、遺跡の分布調査が行われた。本遺跡の範囲が確認され、出土遺物により平安時代末の集落跡、横山城に関連した集落跡として登録された遺跡である。調査は今年度施行区域に遺跡全域が圃場整備事業に係るため、再度遺跡範囲と内容・性格の探査から始まった。



## 2. 調査の経過

調査は遺跡全域が圃場整備事業に係るため、遺構・遺物の集中地域を探す作業から始めた。テストピットの粗掘りは60ヶ所、2mトレンチを東西150mに3本、南北100mに3本を配置した。その結果、遺跡の中心は対象地の中心よりやや南西寄りの地点であることが確認された。計画排水路の南側に遺物の出土が良好な地域と、排水路の断面に壺形土器が露出しており、ここを調査区域として決定した。グリッドは計画基本枠を基点として、磁北に合せた設定を行った。調査の中間期は、調査区域を重機による粗掘りを行い第Ⅳ層上面まで掘り下げた。層序は第Ⅰ層褐色耕作土、第Ⅱ層褐色粘質土層、第Ⅲ層黒褐色粘質土層(炭化物粒子を含む)、第Ⅳ層青灰色粘土層(地山層)である。面精査を行いながら、遺構確認を行った。調査区は140~150-70~85グリッドである。面精査では遺構も明確に検出することができた。面精査の段階で株洲焼系陶器、越前焼系陶器などの破片や摩滅した赤焼土器片が出土した。遺構も溝跡、ピット等を検出することができた。

調査の後半には、調査区内遺構の検出が終了した。遺構掘り下げにおいて、須恵器・赤焼土器・内黒土師器が検出されたが出土量は少ない。排水路断面に露出した土器のとりあげやピットの組合せ、及び平面図測図、遺構写真の撮影など記録作業を行い調査を終了した。



第12図 三田遺跡土層図

### 3. 発見された遺構

本遺跡で発見された遺構は溝跡8条、ピット17基である。溝跡は調査区内に点在して確認、大きな溝跡SD-4はT字形にあり、深さも20~25cmあり、古代水田区割を考えさせるものである。

**SD-1・2・3・4・5・6・7** 154-70~75グリッドで確認された、南北に2~10mの短かい溝跡3条である。SD-3は西方に傾むいており幅20~30cm、深さ15cmを測る浅い溝跡である。覆土は黒褐色土層で、須恵器、赤焼き土器の細片が含まれていた。

**SD-4** 143-144-73~83グリッドで確認された。南北の溝に東西につながる溝で、幅は平均20~50cm、深さ20~25cmを呈している。覆土は黒褐色土で、やや粘性をもち須恵器环片や斐片が溝底部より検出されている。

**SD-9** 143・144-73・74グリッドで、SD-4と重複して確認された溝跡である。幅80~100cm、深さ30~40cmの溝で、SD-4が掘られたのちにSD-9が掘られたことが土層断面で確認された。覆土からの遺物は検出されなかった。

**EP群** ピットは径約15~30cm、深さ15~25cmの比較的浅いピットである。組合されるものはなかった。しかし、SD-4の148・149-78・79で検出されたEP 18・19・21のピットは1.5mの間隔で杭列のようである。

中世の横山城に関連した遺構の検出を期待したが、第Ⅰ・Ⅱ層で中世陶器片を検出したのみで、遺構の確認は認められなかった。本来の横山城は現横山部落内にある六所神社が本丸として、わずかにその痕跡を残すだけである。

### 4. 出土遺物

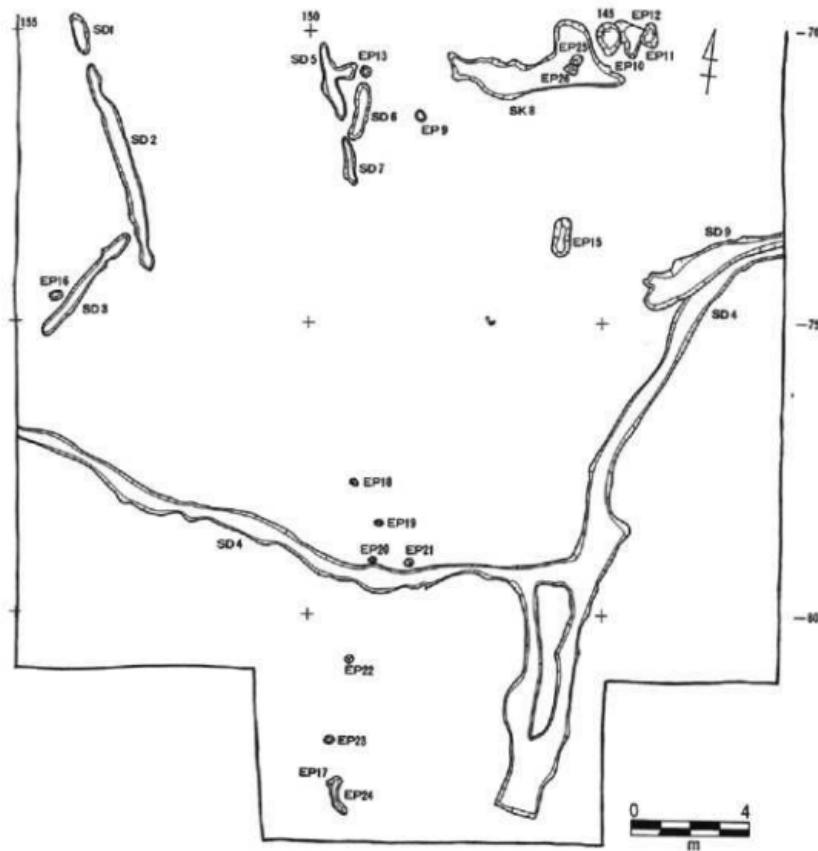
三田遺跡から出土した遺物は、土器、陶磁器、金属製品、自然遺物等である。金属製品は『永楽通宝』2枚、『洪武通宝』1枚、不明2枚の古銭類の他は鉄釘などである。自然遺物は胡桃の実や木片が出ている。

土器は須恵器と赤焼土器が主体であり、黑色土器は10片に満たない。破片総数838片中、須恵器が226片で27パーセントを占め、赤焼土器に対して須恵器の占める比率が平安時代の遺跡の中では比較的高い。須恵器の环は底部切りはなし、すべてへら切りで底部が広くて浅い。小さく『大』と墨書きされたものである(第14図の1)。环の他に高台环、蓋、壺、長頸瓶、斐などの破片も認められ、大形の器種のものには須恵器特有の押圧痕がみられる。赤焼土器は环や碗が多いが、大形のものには須恵器と同様の叩き目のあるものもある。須恵器のなかには、焼きのあまい灰白色を呈するものもかなり多い。

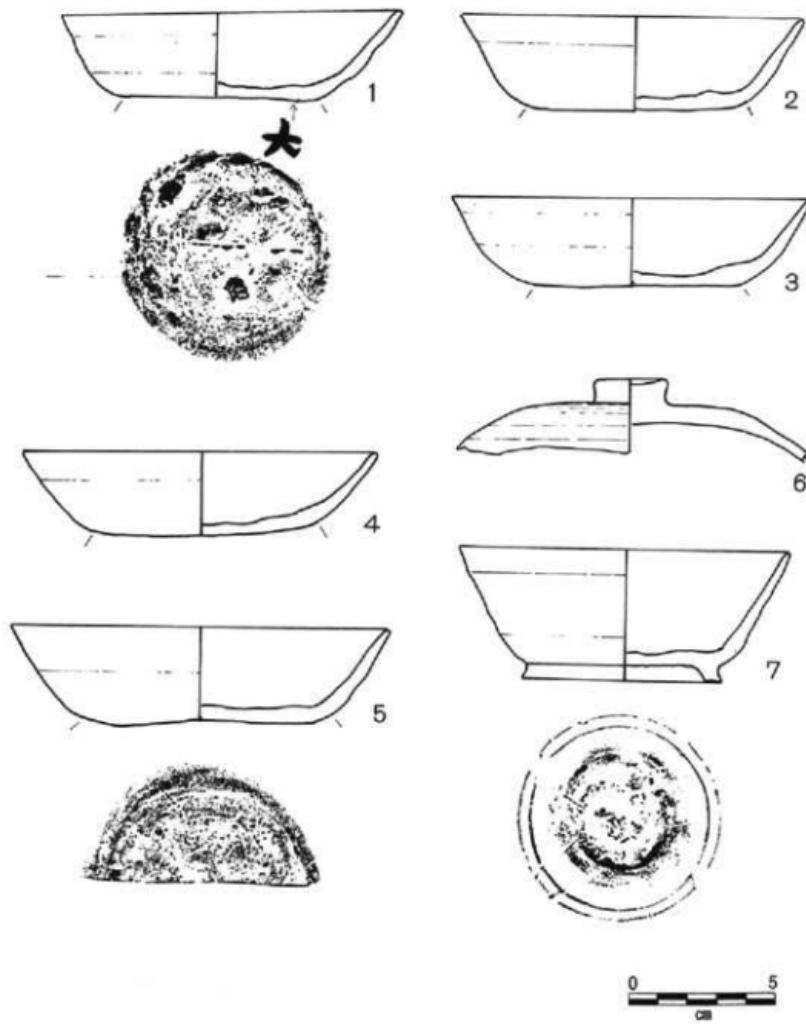
赤焼土器は小破片のみなので器形を明らかにできないが、环、高台环、碗の他に鉢や甕

の類があったようである。底部切りはなしは、すべて糸切りによっている。これらの土器は9世紀後半に位置づけることができるであろう。

陶磁器は146片数えられるが、おおむね明治時代以降のものである。なかに古伊万里や古唐津など近世の陶磁器も混っている。中世陶器などは1片も出土していないところを見れば、平安前期を主体とした遺跡であろうと考えられる。



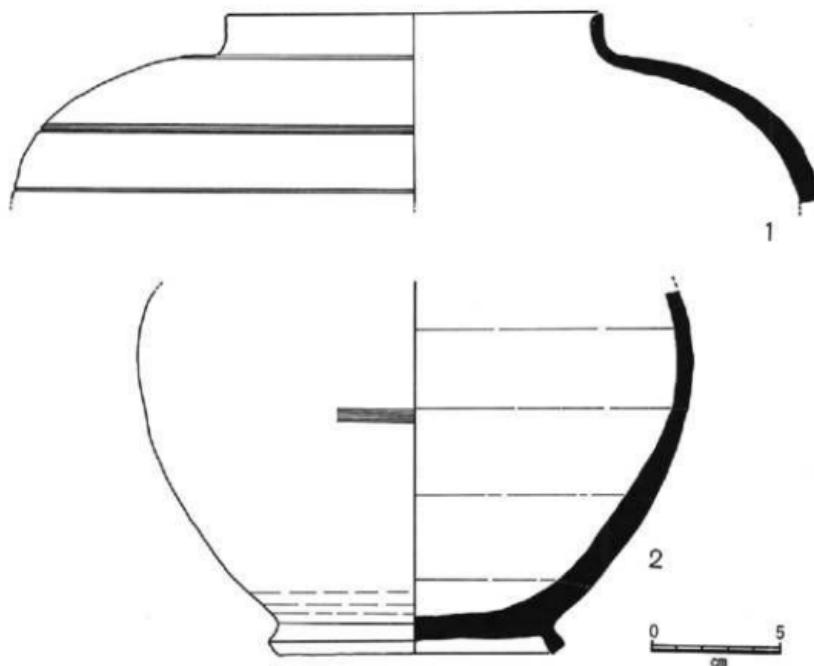
第13図 三田遺跡遺構平面図



第14図 三田遺跡出土・須恵器

## 5. まとめ

三田遺跡は横山城の近くにあるが、中世の遺構は確認できなかった。溝跡や小土塹が検出されたが、その大方は本遺跡の主体をなす平安前期の土器と同時代のものであろう。かって検出したという井戸跡なども中世のものではなく、あるいは平安時代のものかと思われる。強いて横山城との関連を考えるとすれば、近世初頭の陶磁器片が若干あるのみである。本遺跡は標高10mの低地部にあり、河川の氾濫などにより遺構はかなり破壊されていたものと思われる。



第15図 三田遺跡出土・須恵器

## 総 括

54年度に緊急発掘調査を行った若王寺、明成寺、三田の3遺跡は、すべて圃場整備関連の調査である。とくに用排水路等によって破壊される部分の調査であるため、遺跡全体にわたる発掘調査は行わず部分発掘にとどまった。発掘面積は若王寺4,000m<sup>2</sup>、明成寺3,000m<sup>2</sup>、三田3,600m<sup>2</sup>、そのうち精査面積は若王寺550m<sup>2</sup>、明成寺600m<sup>2</sup>、三田820m<sup>2</sup>、3遺跡合計で発掘面積10,600m<sup>2</sup>、精査面積1,970m<sup>2</sup>である。

出土遺物からみれば、若王寺は平安時代、明成寺は平安時代と鎌倉時代の遺物が相半ばし、三田遺跡は平安時代である。発見された遺構は、若王寺で溝跡、明成寺で井戸と土塁、三田で溝跡や土塁、小ピット等であり、建物跡などは検出されなかった。とくに明成寺からは、すでに破壊されていたが中世墳墓らしい遺構が検出され、五輪塔残欠、笹塔婆等が出土した。笹塔婆が発掘によって出土した例は珍らしく、中世の庶民信仰を物語るものとして貴重な資料である。山寺立石寺岩窟中には、大量の笹塔婆が納められている。明成寺遺跡では出土土器も、平安時代の須恵器と赤焼土器、中世の珠洲焼系陶器とともに出土しており、平安時代と中世の複合遺跡である。

若王寺と三田は同じ平安時代の遺跡であるが、出土土器の様相は趣きを異にする。若王寺は赤焼土器が主体をなし、須恵器では糸切り技法の杯が多いが、三田は出土土器中、赤焼土器の占める比率が若王寺に比して低く、須恵器の环もすべてへら切り技法によるものである。三田遺跡が9世紀中葉から後半にかけての遺跡とすれば、若王寺遺跡はこれより時代が下降し10世紀代の遺跡と考えられるのである。

それにしても本地域においては、平安時代前期から赤焼土器がかなりの比率を占め、平安時代後期にいたるや須恵器をしのいでその数を増すことは、赤焼土器が平安時代を通して日常什器の中で主要な位置を占めていることを示している。そして、それは中世にいたってもかなり多く用いられているのではないかと思われる。

部分的な発掘調査に終ったため、集落跡や建物跡などの遺構についての発見は少なく、遺物もほとんど小破片が多くなったが、以上のような所見を得た。

# 図 版

図版 1

若王寺遺跡遠景



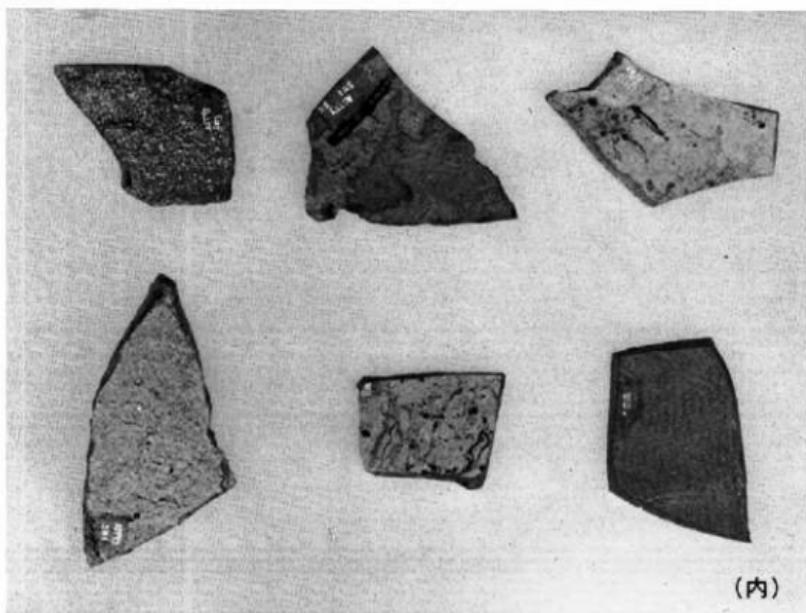
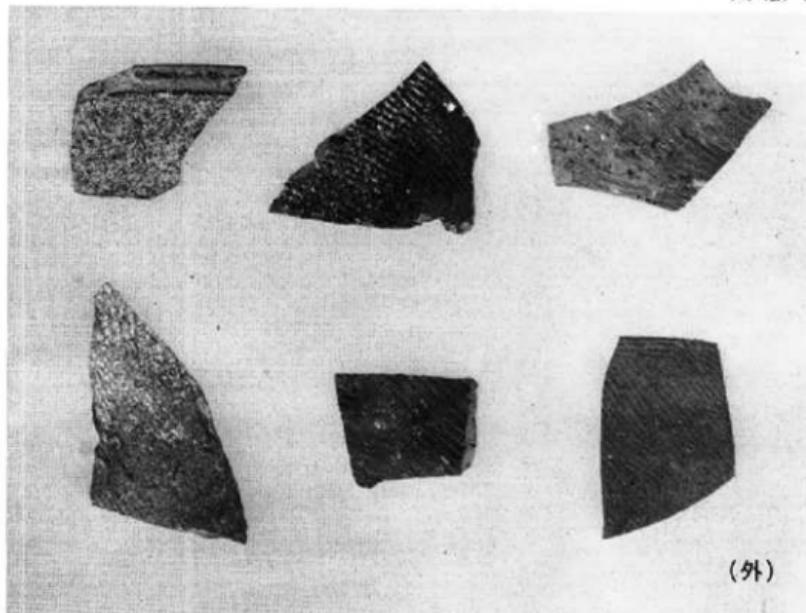
調査区近景 SD-1溝跡



土層堆積状況



図版 2



若王寺遺跡出土遺物・須恵器

図版 3



図版 4

明成寺遺跡・篠塔婆出土状況



明成寺遺跡・五輪塔出土状況



明成寺遺跡

五輪塔一部出土状況



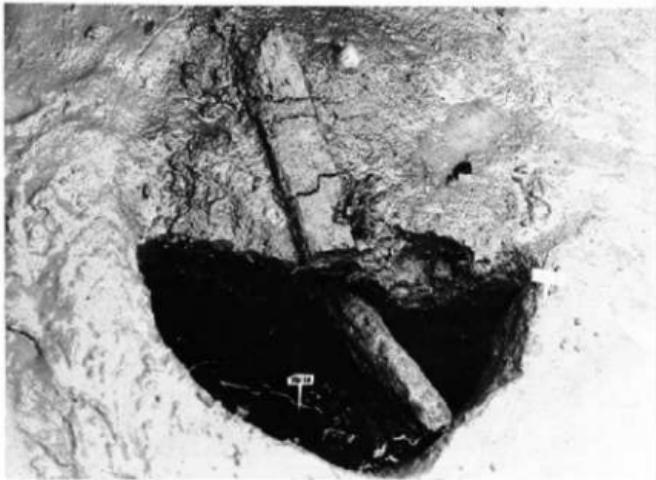
図版 5

明成寺遺跡

SE-1 井戸跡検出状況



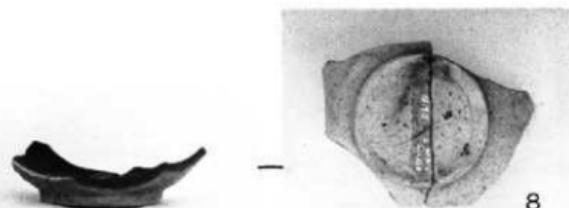
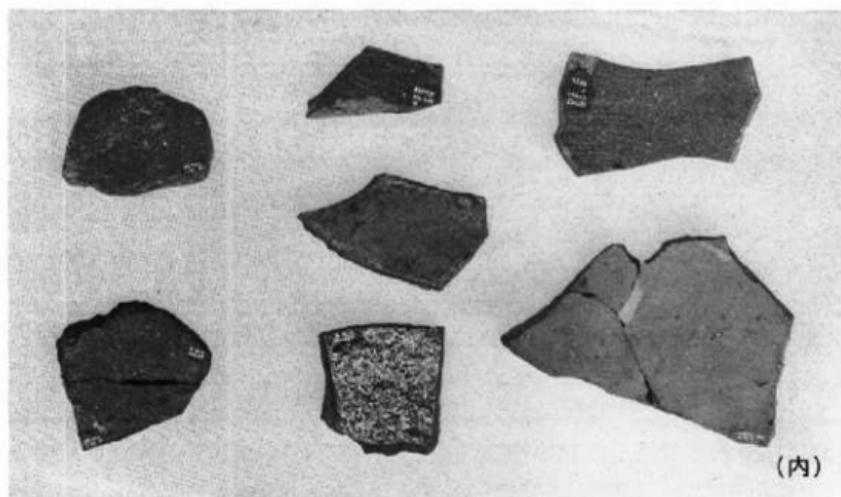
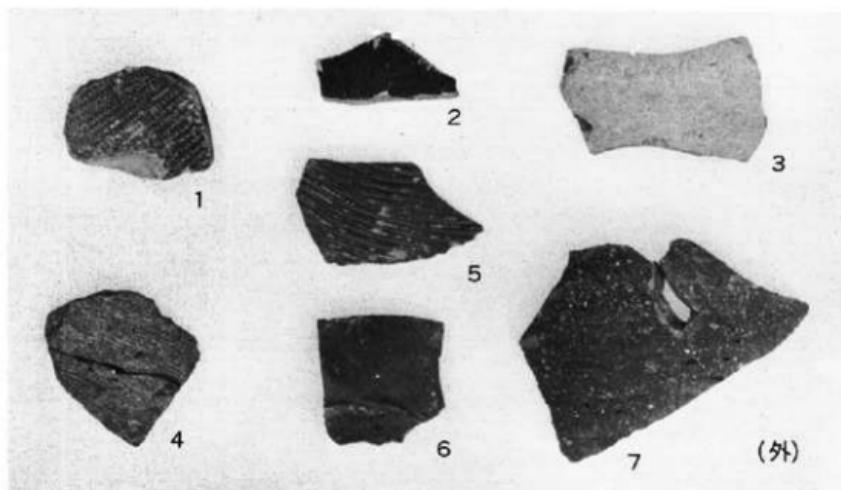
土層堆積状況



完掘状況



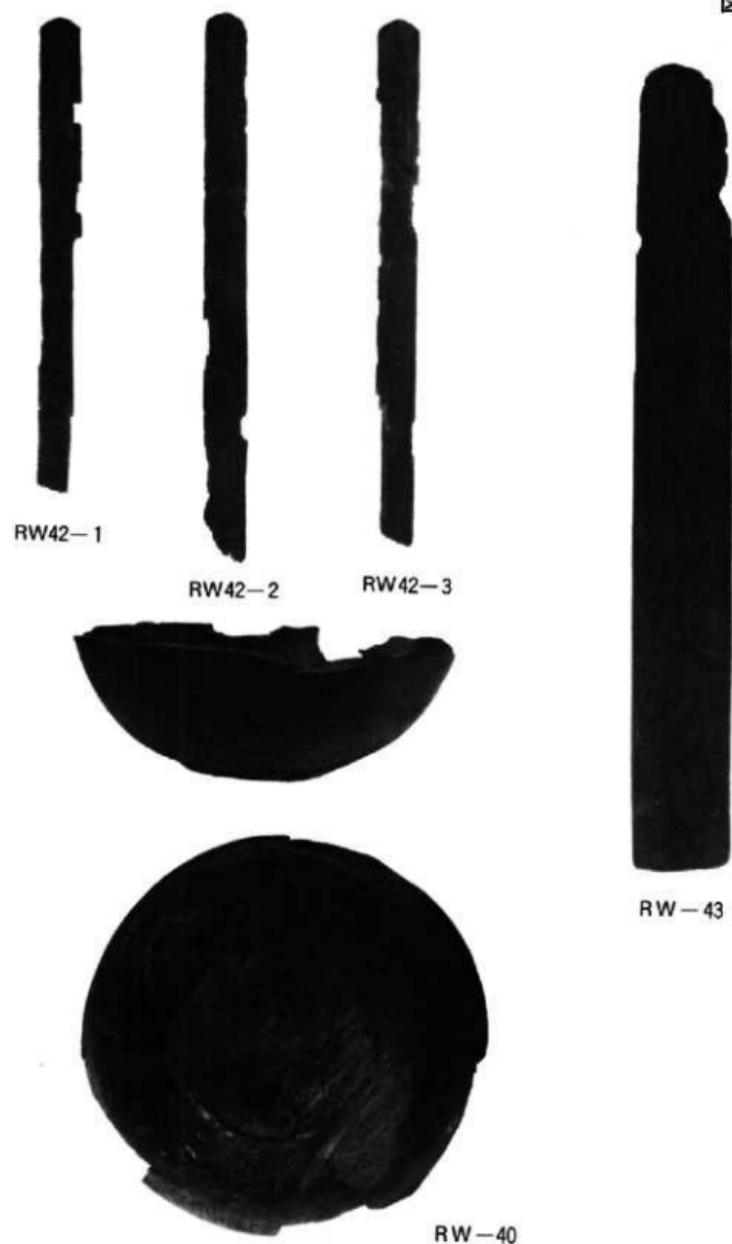
図版 6



明成寺遺跡出土遺物

須恵器 = 1・2・3・6・7

内黒土器 = 8 中世陶器 = 4・5



図版 8



三田遺跡遠景



調査区近景



遺物出土状況

図版9

三田遺跡

SD-6 溝跡内遺物出土状況



同上



RP16



154-80G 遺物出土状況

図版 10

三田遺跡調査区近景（東より）

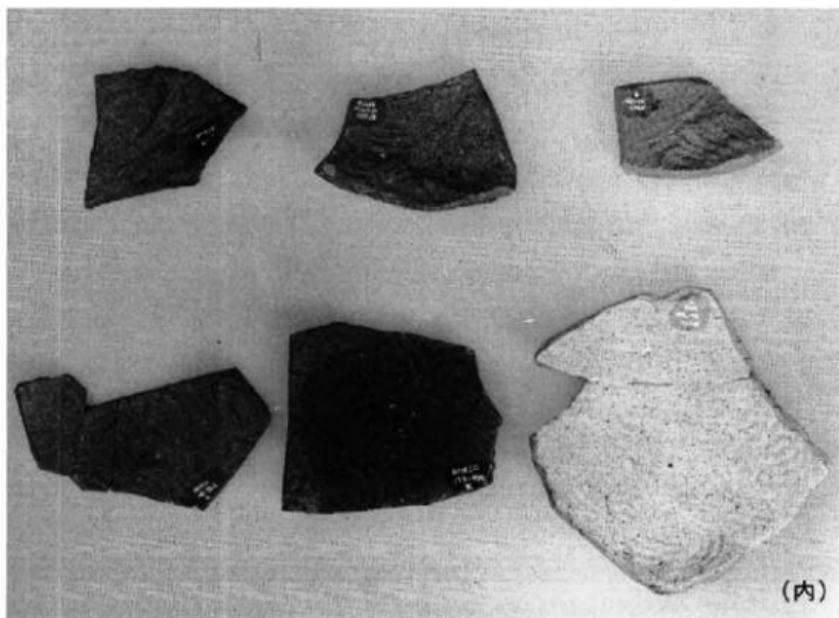
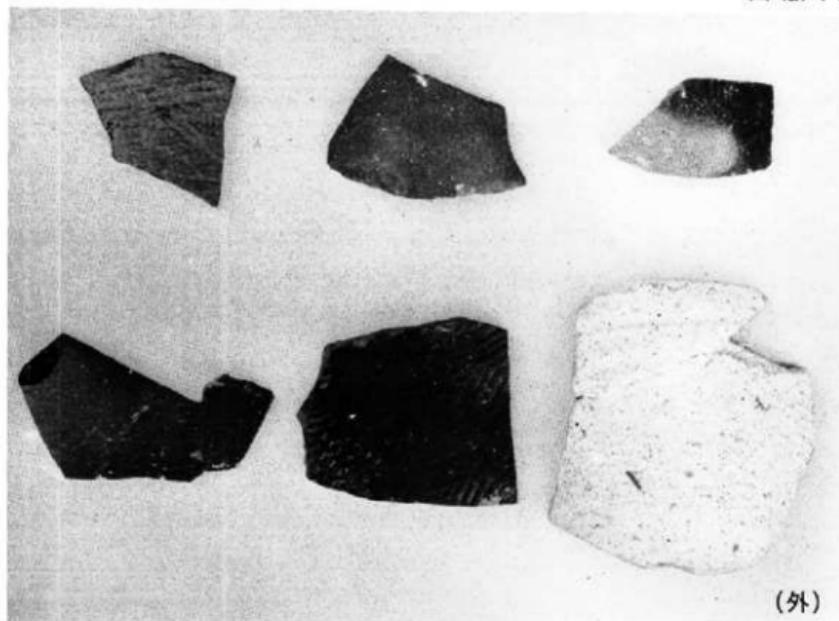


同上（南より）



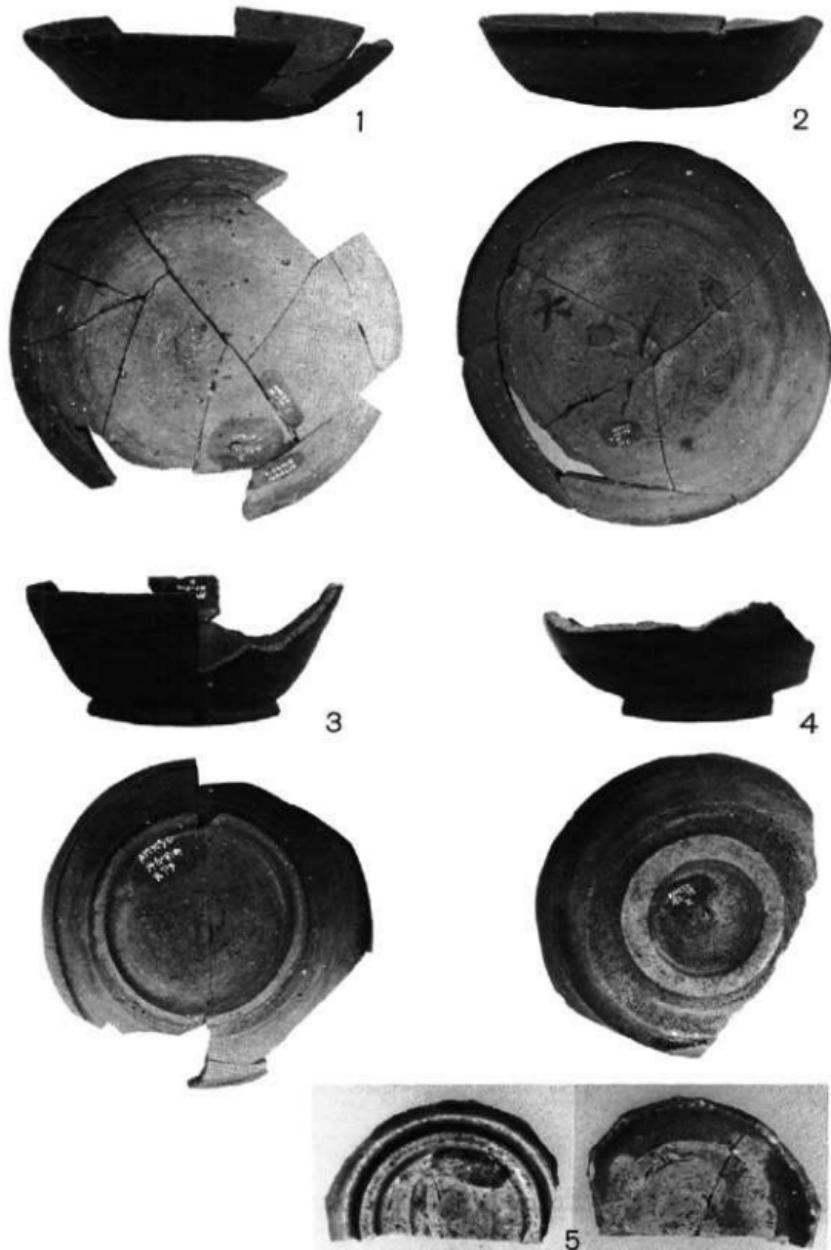
同上（北より）





三田遺跡出土遺物・須恵器

図版 12



三田遺跡出土遺物

須恵器 = 1・2・3

唐津焼系陶器 = 4

古瀬戸系陶器 = 5

---

山形県埋蔵文化財調査報告書第32集

若王寺遺跡  
明成寺遺跡  
三田遺跡  
発掘調査報告書

昭和55年3月29日 印刷

昭和55年3月31日 発行

発行 山形県教育委員会  
印刷 鶴岡印刷株式会社  
鶴岡市山王町14-24 ☎ 22-3080

---